慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	山崎功著 イタリア社会運動史
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1958
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.5 (1958. 5) ,p.450(78)- 454(82)
JaLC DOI	10.14991/001.19580501-0078
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19580501-0078

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評及び紹介

山崎功著『イタリア社会運動史』

わが国における労働運動史や社会運動史の研究は、わずかにその第一歩をふみ出したにすぎない。実際、日本の労働運動史の研究でさえ、未だ資料蒐集の段階にあり、すぐれた研究成果の出現はむしろ将来に期待されている。いわんや、外国の労働運動史の研究の如きは、実に寥々たるものであり、イギリスやフランスそしてまたドイツやロシヤなどの、社会主義運動や労働運動の発展がもっともはなばなしかった国について、その業績はほとんど絶無か、もしくは無いにひとしい。このような意味からも、山崎功氏のイタリア社会運動史が公けにされたことは、きわめて意義のあることである。

本書をまとめるにあたっての著者の態度は、その「序にかえて」のなかにものべられているように、ひとつは、イタリア労働者階級の抵抗の歴史をありのままに伝えることであり、第二には、歴史の叙述を通じて著者自身の方法論を確立することにかけられていたようである。著者が本書の扉に、統一戦線をよびかけるトリアッティの言葉を掲げているのは、長い間のイタリア社会運動史研究の結果得られた著者自身の結論を暗示するものではないだろうか。

本書を通読してまず感じられることといえば、これは書斎にあって文献だけを頼りに書き上げられたものではなく、イタリアに住み、そこにおいてさまざまな歴史的事件を目撃した者でなければ、到底叙述できないような多くの事実が生き生きと語られていることであろう。それによって本書は、歴史書がともすればおちいりがちな単調さからみごとに救われている。

著者はイタリア社会運動史の由来について序文のなかでつぎのように云われる。「一九二〇年代の末期、まだ学生であったころ、ファシズム治下のイタリアに労働運動が死滅していないことを知ってわたくしはおどろいた。年若いわたくしは、かぎりない好奇心をもって乏しい材料を通じてこれをさぐり、ついには、いつの日にかまとめて書こうと決心した。後年わたくしはイタリアにわたり、いくらかの資料をあつめているとき、おしつぶされていた労働者階級が歴史の舞台にたち上り、ファシズムを転覆するのを自分の目でみることができた。このおどろきは大きかったが、同時に、自分が書こうとしていた事項が正当であったのを知り、これまたひじょうなうれしさを感じた。しかもイタリアの勤労者の勝利への巨歩に、日本の勤労者が学ぶべき無数の教訓があるのをみたとき、これを伝えることが、わたくしの義務であるとさえ感じたのであった」と。

本書は、つぎの各章から成っている。

一、社会主義の基石　二、インターナショナルとミハイル・バクーニン　三、無政府主義時代の暴動　四、職工党・労働者党・社会党　五、改良主義の勝利　六、労働戦線の分裂とファシズムへの道　七、工場協議会と工場占領　八、イタリア共産党の創設　九、反ファシズム闘争　十、社共の行動統一協定　十一、一九四三年三月の総罷業とファシズムの崩壊　十二、解放戦における武装抵抗　十三、一九四五年四月二五日　十四、平和と自由のための闘争　あとがき

筆者は、本書の内容の全部について詳細に紹介しようとするものではない。目次をみれば明らかなように、著者が本書のなかで意図していることは、つぎの四点に要約できよう。すなわち、㈠労働運動のイタリア的性格――とくにサンディカリズムとの関係、㈡資本主義の全般的危機のもとにおける社会不安とファシズムの萌芽、㈢ファシズムにたいする反対闘争――社会党と共産党との行動統一協定、㈣第二次大戦後の平和と自由のための闘争である。

イタリア社会運動の歴史を概観すれば、それは資本主義発展の後進性――イギリス、フランス、ドイツなどに比べていちじるしい立ちおくれを示した――とりわけ北部と南部における地域的な跛行性――北部における近代的工場制度の発展と南部における前近代的大土地所有制度との矛盾によって、大きな制約をうけていたことが、考えられる。すなわち、イタリアの社会運動は最初、一部の進歩的な知識人や大学教授などによってその基礎が形成された。ジュゼッペ・マッツィーニの共和主義、ガリバルディの流れを汲む社会民主主義、ジュゼッペ・モンタネッリ、ジュゼッペ・フェルラーリなどの学者やカルロ・ピサカーネのような革命家による急進主義などで、これらの人々の運動は多くの場合、理想主義的なものであり社会主義運動ではなかった。また、そうだとしても空想的社会主義の段階にとどまっていた（一二―一四頁）。

しかしながら、イタリアに本格的な社会主義運動の発展をみたのは、一八六〇年代にミハイル・バクーニンによってアナーキズムが伝えられてからのことであった（二九頁）。当時のイタリアは、国際的社会主義運動の中心から離れていた。一八六四年にロンドンにおいて結成された国際労働者協会、いわゆる第一インターナショナルが、マルクス主義をはじめとする社会主義理論の指導的な影響のもとに、イギリス、フランスおよびドイツの労働者階級によびかけていた頃、イタリアからもマッツィーニおよびその影響をうけた人々がこれに参加したが、それにもかかわらず第一インターの指導的な理念であったマルクス主義よりも、のちに分派として批判され除名されるにいたったバクーニンの無政府主義の思想が、イタリア労働運動を支配していた。バクーニンのアナーキズムがいかにしてイタリアに根をおろすことができたか。資本主義発展のたちおくれと近代的プロレタリアートの未成熟、それに加えるに労働運動にたいする苛酷な弾圧と専制的な政治、これらが労働者階級をして、運動の組織的発展と理論的な把握にみちびくよりは、無政府主義的な暴動に追いやったのである。第二章および第三章は、この点についてふ

れている。

しかしながら、バクーニンのアナーキズムは、イタリアの労働組合運動に決定的な特徴を刻印したのであって、無政府主義の影響は、長く労働運動を支配し、その直接行動主義はやがてファシズムの登場のための地ならしに役立ったのだった。イタリアにおいて、はじめてあらわれた労働者の政党は、一八八二年ミラノにおいて建設されたイタリア職工党であった。これはミラノが、近代工業の中心地であり、労働運動の中心となったためである(七二頁)。しかし職工党はその名の示す通り、近代的なプロレタリアートの前衛としての側面よりもむしろ職人的な要素をもち、ブルジョア急進主義の影響からも自由ではなかった。労働者階級の政党としては、一八九一年に誕生したイタリア労働者党の方が、はるかに前進していた。これはやがて一八九三年九月、イタリア労働者社会党となり、やがて一八九五年イタリア社会党と改名されるにいたったのである。

この当時になると、イタリア資本主義も帝国主義段階に突入し、農村全体が危機に見舞われ、暴動が各地に頻発したが、一八九三年にはクリスピ内閣はアフリカに侵略戦争を試みたのであった。こうした政治的な動きを背景にして、従来まで労働運動や社会主義運動を支配してきたバクーニン主義と並んでマルクス主義や中産階級的な改良主義が、大きな影響をあたえるに至った。だが、おくれて近代国家に転身したイタリアの資本主義は、北部における急速な近代化と南部における旧態依然たる封建的大土地所有制度の矛盾に悩み、

労働運動も社会主義の影響をうけたとはいえ、多分に農民一揆的な暴動の痕跡を払拭することができなかった。シチリアにおける農民の暴動も、ミラノにおける労働者の暴動も、その結果としてはげしい弾圧政治を招来しただけであり、社会党はこれらの大衆の革命的エネルギーを正しく評価し、適切に組織化する能力に欠けていたため、その議席は、一九〇〇年の選挙において一六から三二に増加し、社会党をふくむ極左派は、九五名に増加したにもかかわらず、ジョリッティの改良主義の勝利を助けたにすぎなかった。労働者農民の自然発生的な暴動とこれにたいする社会党およびその下部組織としての労働評議会の無為無策、政府の苛酷な弾圧、このような条件がいかにしてファシズムの勝利への途を開く要素となったか、これについて著者は、五章および六章においてくわしくふれている。

「イタリア労働運動史を通じて特徴的なのは、多くのばあい、大衆の自然発生的な革命性がより強く、指導的立場の機関がこれに追随またはこれを制止しているということである」(一五〇頁)。イタリア資本主義のたちおくれ、云いかえれば工業のおくれた発達、労働者階級の未成熟、従ってまた指導者層の理論的武装の貧弱さのために、社会党は、第一次大戦によってもっとも大きな打撃をうけた下級勤労労働者、農民および都市の知識層の不満を正しく評価することができず、その結果、これらの人々をファシズムの陣営に追いやったというのが、本書を一貫して流れる著者の見解である。第七章、第八章および第九章においては、第一次大戦後の混乱と革命的な状勢の

なかに、一九二〇年九月、ついに工場占領にまで発展してイタリア全土を震撼させた金属労働者の罷業を絶頂とする労働運動の未曾有の昂揚、しかもそれにもかかわらず社会党の支援が得られなかったため、敗北した労働運動とは逆に、金融資本と君主制を頂点とする封建勢力と教会の強力な支援のもとに、勢力を増してゆくファシズムの姿が描かれ、こうした事件を背景にして、社会党から分離してイタリア共産党が創設され、反ファシズム闘争が展開されるまでの経緯について具体的にくわしくのべられている。このあたりから、第十章、社会党と共産党との行動統一協定　第十一章、一九四三年三月の総罷業とファシズムの崩壊　第十二章、解放戦における武装抵抗、にいたるまでの叙述は、本書のいわばやまをなすものであり、またもっとも興味ある部分である。イタリア国民のファシズムにたいするレジスタンスがどのような形でおこなわれたか、とりわけ一九三七年七月、社会党と共産党との行動統一の協定に達するまでの過程は、ファシズムの脅威の前に何らの組織的抵抗をなしえなかった日本の知識階層や勤労者にとって偉大な教訓としてうけとられるにちがいない。

とりわけ、第二次大戦の末期、イタリアが、連合軍とナチス・ドイツとの戦場となり、市民が、パルチザンを組織して解放戦に参加しなければならなくなったことなどは、われわれ日本人の経験しえなかったところであり、ファシズムにたいする強力な武装抵抗の事実を知って驚かざるをえないであろう。社会党と共産党の行動統一は二十世紀の社会主義運動にとって実に重大なまた困難な問題であるにもかかわらず、イタリアにおいて成功したのは何故か。ファシズムにたいする闘争が、全国民の闘争に拡大し発展したという事実そのもののなかに見出されることは云うまでもない。

第十三章および十四章は、ファシズムの倒壊によって自由を獲得したイタリア国民の、戦後における困難な闘争をあつかっている。ファシズムは打倒されたけれども、平和と自由は永遠に保障されたわけではなかった。社会党と共産党との統一行動は社会党大会において再確認されたけれども、一九四八年を峠として、デ・ガスペリのキリスト教民主党は反動化し、北大西洋同盟への加入によって内においては産業資本家、地主および教会勢力と結び、外にたいしては外国帝国主義に奉仕する奴隷的存在となった(三六二頁)。もちろん、労働者階級はこの反動的な攻勢にたいして手をこまねいていたわけではなかった。たとえば一九四九年十月、ジェノヴァで開かれた労働総同盟第二回全国大会では、ディ・ヴィットリオによって、労働者階級による建設的平和的な経済計劃が提出されたが、これは電気、灌漑、開墾の三事業を根幹とする膨大な計劃で、国民各層の間に大きな反響をよびおこした。このようにして、イタリアの労働者階級はファシズムにたいする闘争の経験から貴重な教訓を学び、自由と平和と民主主義の政策の要求をかかげて、今日もなお、闘っている。

以上において、われわれは本書の内容をきわめて簡単にふれてみた。本書の「あとがき」にものべられているように、叙述が物語り

的な要素をとりいれている点は、文章の迫力を強める上に充分の効果を発揮しているが、全体として分析的な叙述が不足している点は指摘されねばならない。それから、本書は大体一九五〇年頃までで終っているが、さらにその後のとくに最近の労働運動について著者の新しい研究を期待してやまない。

著者は、このすぐれた研究をもって、ただ基石をおいたにすぎないと謙遜しておられるが、著者が念願されるように、はたしていつの日にか向学に燃える若い世代によって、これを基礎としてよりすぐれた業績が生み出されるであろうか。――一九五八・三・七――

（一九五七年、淡路書房新社、五六〇円）　（飯田　鼎）

《追記》筆者の都合で、本書の書評が以外におくれてしまったことを、編集者にお詫び致す次第である。

関山直太郎著

『近世日本の人口構造』

人口史の研究は、我が国においては比較的隆盛でない分野の一つである様に考えられる。殊に明治以前について言えば、個別的、地方的研究を除いては、その研究者は少なく、業績も決して多いとは言えぬものがある。しかしながら、この事は直ちに現在の研究者による研究水準それ自身の低いことを物語るとは言えない。何故ならば、人口史研究の基礎的前提である人口統計資料――可能な限り科学的合理的方法で算定された――が明治以前において存在しなかったこと、なかんずく、大化改新による全国戸籍の編纂以後、徳川中期の全国人口調査に至るまでは、全国的な人口統計の編纂は勿論、戸籍帳の作成すら全く行われなかったことを無視してはならぬからである。勿論織豊政権の成立によって、或いは幕藩体制によって、封建体制が確立し、領主が領内の一円知行権を掌握するに及んで、領内の人口調査は可能となったし、又、農民の賦役労働量を測定する必要から、近世初期においては盛に一藩内の調査が行われている。従って個別的人口統計資料は、十七世紀より存在し始めている。しかしながら、それ以前においては、即ち荘園的土地所有関係に基礎をおく鎌倉、室町幕府下、或いはその崩壊過程である戦国期にあっては人口調査を行う必要と可能性はまずなかったとしていい。この様に、我が国における人口史研究はいちじるしく困難であり、断片的史料を多く集めて推計するか、不完全な全国統計から推計を行うか、二つの道のいずれかを選ばねばならぬのである。

さて、関山直太郎氏はかくの如き学界の要望に応えて『近世日本の人口構造』を発表された。同氏は既に『日本人口史』（昭和十七年）、『近世日本人口の研究』（昭和二十三年）の著書及び多数の専門論文を公にされ、我が国に数少ない人口史研究者の一人である。まず新しい著書の内容を紹介しよう。

序章（一―九頁）において著者は徳川中期以前の我が国人口調査の沿革について略説した後、第一章「人口調査としての宗門人別改制度」（一〇―六一頁）では、幕府の禁教政策から出発した宗門改の制度が各藩において行われた人別改と混同される様になり、宗門人別帳が戸籍簿として用いられる様になったことを示される。そして第六節「人口統計資料としての宗門人別帳の価値」で宗門人別帳の史料批判を試み、政策上厳重に行われ、正確を期された宗門人別改であったが、史料としての宗門人別帳には幾つかの難点を有するとし、次の諸項目を挙げて居られる。

(一) この調査の趣旨は著者の言う「現住本籍人口」調査であったが、これが徹底されず、転籍削除が行われなかったりおくれたりする場合が多い。

(二) 逆にその村の帳簿に記されず他村で登録されてその地に住んでいた者がいる。これは都市に多かったとみられる。

(三) 帳外れの無籍者の存在。

(四) 武士、エタ・非人の帳簿上の処置如何によってその地の人口の正数を知り得ない場合。

(五) 藩によって戸籍から除外される年少者の年齢が異なること。

(六) 出生・死亡・婚姻等の届出が正確でないため正確な動態が摑めない。

これらの難点は、研究者が十分に考慮斟酌し、適当なる操作を加えることによって克服されねばならぬものとされる。

第二章「全国人口の調査」（六二―一二一頁）では、享保六年に始まり、同十一年から幕末に至る間六年毎に行われた幕府の全国人口調査について、その調査の動機、方法、範囲、調査回数と毎回の人口数、除外人口等について詳細に述べられる。氏は享保六年（丑年）の調査が、十一年（午年）以後の所謂子午改と異なって、単なる人口書上であり、全国人口調査と別箇に取扱う考え方に反対され、両者はその方法において異ならず、ただ第一回の調査は将軍吉宗の発案が五年（子年）調査に間に合わなかったため、丑年に行われたとされている。

この全国人口の調査は、享保改革の一環として始められた。各藩は、各村から一定期日の「現住本籍人口」と前回との相違を集計し、これを国郡別にして幕府へ報告する。幕府は全体を総計して国別の人口数を算定した。しかしこの全国人口の調査についても、宗門人別帳の史料批判で示されに短所が当てはまり、従ってこれをもって直ちに完全な人口数の測定がなされたとはなし難いのである。関山氏は、幕府においてとらえられたこの全国人口数、即ち二千五百万乃至二千七百万と言う数字に、除外された人口数を加えて、享保以後の我が国人口総数を推定される。この場合推定を行う一つの基礎として明治初年の人口数、即ち所謂壬申戸籍の編纂を期として行われた、完全とは言えぬまでも、徳川時代に比べれば遙かにすぐれた方法をもってなされた全国人口調査に基く数字――後年修正が加えられた――約三千四百八十万と、現在知られる幕末最後の全国人口集